

道徳的価値を自分のこととして捉え、考えを深めることのできる児童の育成 ～自分の考えを基に、友達と交流し合う活動を通して～

I 主題設定の理由

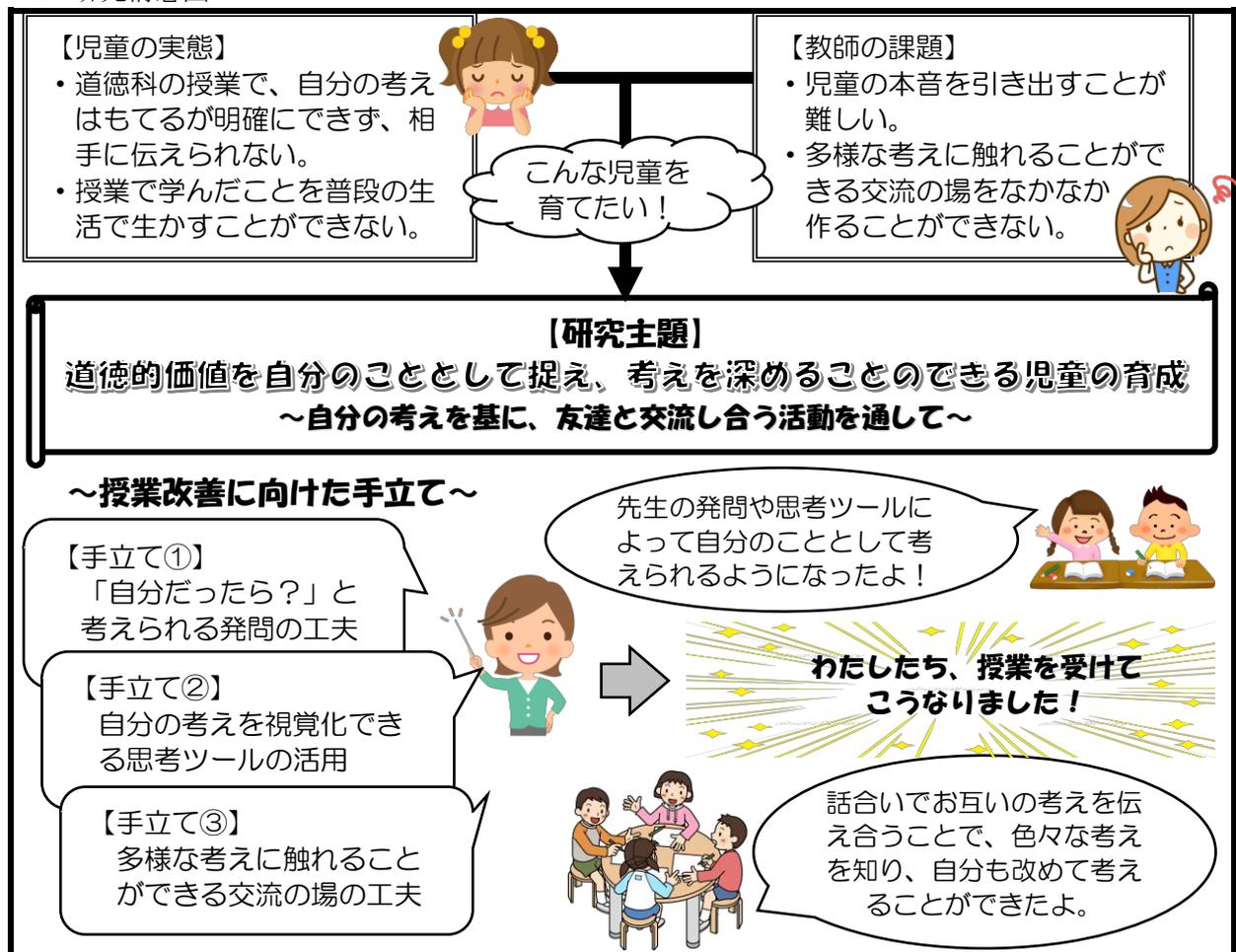
平成29年7月に文部科学省より小学校学習指導要領解説(特別の教科道徳編)が発表された。この中で道徳科の授業においては、児童が主体的に考え、議論する道徳科への転換が図られている。また、群馬県学校教育の指針では、「交流する場面において、多様な感じ方や考え方を伝え合い、比較するなど、目的に応じた効果的な学習活動を設定すること」が求められている。一方、授業を進める中で、「児童の本音を引き出すこと」「多様な考えに触れる交流の場を作ること」が難しいという教師の課題が挙げられた。

本研究の対象児童は道徳科の授業の中で、教材の登場人物の心情や行為等を通して道徳的価値を理解しているが、自分のこととして十分に道徳的価値の自覚を深めるところまで至っていない。また、ほとんどの児童は自分の考えをもつことができているが、それを友達に伝えたり、学んだことを生活に生かすことができなかつたりする児童も見られる。このような課題から、具体的な手立てとして以下の3つを考えた。①「自分だったら?」と考えられる発問の工夫、②自分の考えを視覚化できる思考ツールの活用、③多様な考えに触れることができる交流の場の工夫である。児童が道徳的価値に対する自分の考えをもてるような発問をし、それを視覚化することで自分の考えを再確認することができる。また、友達のとおりであることや違いに気付くこともできる。さらに、友達と交流活動を行うことで、多様な考えがあることに気付き、その中で自分の考えを見直したり、互いの考えのよさを認め合ったりすることができる。

これらの活動を通して、児童は道徳的価値を自分のこととして捉え、考えを深めていくことができると考えた。さらに、このような道徳科の授業を積み重ねることにより、学んだことを生活に生かしていこうとする態度を養っていきたいと思い、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

児童が道徳的価値を自分のこととして捉え、考えを深められるように以下の3つの手立てを考えた。

手立て① 「自分だったら？」と考えられる発問の工夫
手立て② 自分の考えを視覚化できる思考ツールの活用
手立て③ 多様な考えに触れることができる交流の場の工夫

(1) 手立て①「発問の工夫」について

道徳科の授業において、教材中の出来事を通して児童の考えを深めていくことが大切なことである。しかし、教材の扱い方を間違えてしまうと、ただの読み取りの授業になってしまい、表面的な感想を述べて終わりになってしまう場合がある。そうならないためには、教材と自分をかけ離れた存在と認識させるのではなく、自分のこととして捉えさせた上で、本音を引き出す発問の工夫が必要となってくる。そこで、以下のことに留意した。

- 中心発問の精選…教材を十分に分析し、ねらいに迫る。
- 補助発問の充実…児童の本音を引き出し、考えを深める。
- 役割演技…特定の役割を与えて即興的に演技し考えを深める。
- 動作化…動きを忠実に真似して、実感的な理解を深める。
- 劇化…動きやせりふの真似をして、理解を深める。

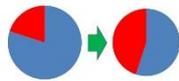
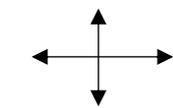


【図1】
役割演技で「自分だったら？」と考えられる発問

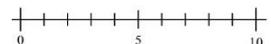
(2) 手立て②「思考ツールの活用」について

道徳科の授業において、教師の発問に対し、児童が自分の考えはもてるが明確にできず、相手に伝えられないという課題がある。そこで、自分や友達の考えが視覚化される思考ツールを活用することで、自分の考えに自信をもって意見交流できると考えた。以下は思考ツールの例である。

- マトリクス…縦軸と横軸から4分割の枠組みを作る。自分の考える領域にネームプレートなどを貼ることで、自分の立場を明確にできるようにする。
- 心情メーター(円)…揺れ動く気持ちを視覚化し、誰でもその心の動きが確かめられるようにする。
- 表情円…嬉しい・楽しい・悲しい・怒りなど自分の感情を理解し、相手に伝えられるようにする。
- スケールリング…0～10の目盛りを振り、ある考えや思いを10段階にするとどこになるかを表現することで、自分の立場を明確にできるようにする。



【図2】
心の動きを視覚化する思考ツール『心情メーター』の活用



(3) 手立て③「交流の場の工夫」について

道徳科の授業において、話し合いを効果的に展開し、児童の道徳的なものの見方や考え方を深めていくことが大切である。そこで、多様な考えに触れる交流活動の場の工夫をすることとした。交流活動の工夫として次のような方法が考えられる。

- ペア、グループ、自由討議による話し合い…目的や発達段階に応じて話し合いの形態を工夫し、伝え合い、聞き合うことで、友達の考え方に対する理解を深めたり、自分の考え方を明確にしたりできるようにする。
- ネームプレート、挙手、帽子的色分け…一人一人の立場を明確にした話し合いができるようにする。
- 座席の工夫…児童がお互いの顔を見合わせ、一人一人の感じ方や考え方を伝え合い、聞き合うことができるようにする。



【図3】
自分とは異なる立場の意見を聞き、多様な考えに触れる交流活動の場

III 研究のまとめ

1 成果

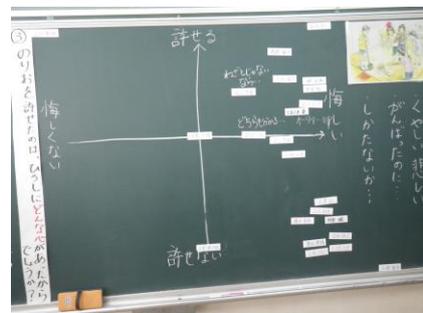
- 中心発問の前後に意図的な補助発問を入れたことや、「もし、あなたの立場だったら…」という発問をしたことは、道徳的価値を自分のこととして捉えるのに効果的だった。
- 発達段階や教材の特性に応じた思考ツールを活用したことは、自分や友達の考えが視覚化され、多様な考えに気付いたり、比較したりするのに効果的だった。また、児童の思考の流れを明確にすることもできた。
- ペア、グループ、自由討議など発達段階や目的に応じた学習形態を取り入れたことにより、意見交流が活発になった。そのことにより、自分の考えを深めることができ、多様な考えに触れることができた。
- 以上3つの手立ての有効性から、自分の考えを基に友達と交流し合う活動を充実させることができ、道徳的価値を自分のこととして捉え、考えを深めることのできる児童の育成につながった。



【表情円】



【心情メーター】



【マトリクス】

【図4】 発達段階や教材の特性に応じた思考ツールの活用

2 課題

- 思考ツールにより、自分や友達の考えを視覚化し、交流を行うことができたが、全体でより考えを深めていくために、考えの変容や交流後の変化などを板書で整理していくとよい。
- 自分のこととして捉え、考えを深めることができたが、学んだことを生活に生かしていく態度を養うために、振り返りの発問についてより吟味していく必要がある。

<参考文献>

- 『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』(平成29年7月 文科省)
- 『はばたく群馬の指導プラン』(平成24年3月 群馬県教育委員会)
- 『はばたく群馬の指導プランII』(令和元年8月 群馬県教育委員会)
- 『「深い学び」で生かす思考ツール』(小学館 田村学・黒上晴夫 著)

IV 研究の実践

実践例1 (多那小学校 3・4年 大澤 春奈 教諭)

1 主題名 相手を思いやる心 B 親切、思いやり

2 ねらいと教材

ねらい 親切にできたときとそうでないときの気持ちの違いを考えるを通して、進んで親切な行いをしようとする態度を養う。

教材名 『バスの中で』(出典 小学道徳 生きる力3 日本文教出版)

3 主題設定の理由

(1) 価値観

困っている人や助けを必要としている人に対し、その人の気持ちを思いやり、親切な行いをしようとする態度は、より豊かな人間関係を構築する上で非常に重要である。ただ、相手を助けたい、助けた方がよいと思っても、恥ずかしさや迷いから行動にできないこともある。このようなとき、相手を助ける行動に踏み出す支えとなるのが思いやりの気持ちである。相手の状況をしっかりと見つめ、自分のこととして置き換えて考えることで相手の気持ちが想像でき、恥ずかしさや迷いを乗り越えることができる。相手を思いやり親切にすることは、人と人が助け合い気持ちよく生活するうえで大切な行いであることを理解させ、進んで行動できる力を身に付けさせたい。

(2) 児童観

本学級は3・4年の複式学級で道徳の授業を行っている。実態調査のアンケートは下記のようにあり、4月当初に比べ、自分の考えを相手に伝えられるようになったと感じている児童が増えた。また、全員が友達のよい意見に気付けるようになったと感じている。本時の道徳的価値『思いやり』については、ほぼ全員の児童が「誰かに親切にしてもらったことがある」と答え、『思いやり・親切』というものが児童達にとって身近なものであると考えられる。一方で「親切にしたかったのに恥ずかしかったり、勇気が出なかったりしてできなかったことはありますか。」という質問に対しては3人が「はい」と答えるなど相手を思いやる気持ちをもっていながら行動に移すことに抵抗があると考えている児童もいる。本時を通して、親切な行いをすることは、相手を助け、より気持ちのよい状況に導くことができることをしっかりと理解させたい。

	4 月		8 月	
①自分の意見をもつことができましたか。	はい： 9人	いいえ： 0人	はい： 9人	いいえ： 0人
②授業の中で発言できるようになりましたか。	1回:1人 2～3回:4人 4回以上:4人		1回:1人 2～3回:3人 4回以上:5人	
③友達のよい意見を見つけることができましたか。	はい： 4人	いいえ： 5人	はい： 9人	いいえ： 0人

(3) 教材観

「わたし」はバスの座席に座っている。バスが満員となったところへ1人のおばあさんが乗ってくる。「わたし」はよろよろしながら立っているおばあさんが気になって仕方がないが、なかなか声をかけることができない。葛藤の末、最後にははっきりした声で「ここへ座ってください。」と言え、席を譲ることができたという内容である。なかなか声をかけることができない「わたし」や、心で争い始めた「2人のわたし」の思いをしっかりと考えさせううえで、やっぱり気になって仕方がなく、どうとう声をかけることができた「わたし」の姿から、相手の気持ちを思いやり、進んで親切にすることのよさを考えさせたい。

4 授業の実際

(1)準備 教科書、学習プリント、場面絵、心情メーター

(2)展開

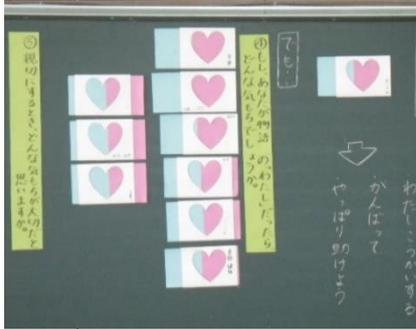
過程 (時間)	主な学習活動	指導上の留意点及び支援 (太字は本研究に関連する部分)
導入 (5分)	<p>1. 親切にしてもらった経験を交流する。</p> <p>誰かに親切にしてもらったことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 忘れ物をしたとき、友達が貸してくれた。 けがをしたとき、おうちの人が迎えに来てくれた。 	<p>【手立て①】</p> <ul style="list-style-type: none"> アンケート結果から日常生活の中の親切な行いの場面や気持ちを想起させ、本時の学習へつなげる。
展開 (30分)	<p style="text-align: center;">めあて 親切にすると、どんな気持ちが必要か考えよう!</p> <p>2. 『バスの中で』を読んで考え、話し合う。</p> <p>【補助発問】 「わたし」はどんなことが気になっているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> おばあさんが倒れないか心配。 座りたいと思っているおばあさんがかわいそう。 近くの人は席を譲ってあげてほしいな。 誰か助けてあげてほしいな。 <p>【補助発問】 「2人のわたし」はそれぞれどんな気持ちをもっているのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 席を譲ってあげたいけど、たくさんの人がいるから声を出すのが恥ずかしい。 「どうぞ」と言って断られるのが恥ずかしい。 おばあさんが転んでしまったら大変。 おばあさんは困っているに違いないから助けたい。 このまま誰も声をかけなかったらどうしよう。 <p>◎心情メーターを何度も左右に動かしながら、2つの気持ちの間で葛藤している姿が見られた。視覚化することで自分の考えを表現できていた。</p> <p>▼範読を聞きながら、心情メーターを自由に動かしたり、ペアで話し合いながら動かしたりする活動があってもよかった。</p> <p>【補助発問】 「わたし」はなぜ(どんな思いで)おばあさんに席を譲ったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 知らん顔はできない。助けよう。 誰かが助けるのを待つのではなく、わたしが助けるんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> おばあさんのことを心配する「わたし」の気持ちを共有できるようにする。 周囲の人々に視線がいく「わたし」の姿から、おばあさんを助けたい気持ちが膨らんでいることをおさえる。 <p>【手立て②】</p> <ul style="list-style-type: none"> 心情メーターを使いながら心の中を言葉にさせていくことで、自分の考えを表現したり、相手の立場を認めたりできるようにする。  <ul style="list-style-type: none"> 葛藤を乗り越えて、思いやりを行動にした強い気持ちを捉えられるようにする。 

3. 自分が親切にするときの気持ちを考える。

【中心発問】

もし、あなたが物語の「わたし」だったら、どんな気持ちでしょうか。

- ・助けたいと思うけど勇気が出なくて声をかけられない。
- ・他の誰かが助けてくれるだろうと声をかけない。
- ・おばあさんが心配なので助ける。
- ・困っている人には声をかける。



【手立て①】

- ・資料から離れ、自分のこととして捉えられるような発問をし、『助けたい』と『でも…』という双方の考えを取り上げ、どちらも理解できるようにする。

◎「助けたいと思うけれど、勇気が出なかったり、恥ずかしかったりして声をかけるのが難しい」と考えた児童は少数派だったが、心情メーターを使って自分の思いをしっかりと表現することができていた。少数派の児童を意図的に指名し、考えを聞いたところ、「私もこの場面ではそう感じるかも」というつぶやきがあり、学級全体に異なる考えも認める雰囲気を作ることができた。

4. 本時の振り返りとして、親切について大切にしたいことを考える。

【中心発問】

親切にするとき、どんな気持ちが大切だと思いますか。

- ・困っている人がいたら、自分から進んで親切にする。
- ・思いやりの気持ちは行動することによって相手に伝わるから、勇気を出して行動する。
- ・相手の立場に立って考えてどうしてあげたらいいか考えてみる。

【手立て③】

- ・3人グループでの意見交流の場を作り、多様な考えに触れることで、親切にするときに大切にすべき気持ちに気付くようにする。

終末
(10分)



◎グループの話合いの中で、相手のよい意見を見付けることができていた。また、友達のよいところを発表する際、「〇〇さんの△△という意見がよかったです。」という発表方法をとったことで、お互いを認め合う場を作ることができた。

▼個人で「これからどうしていきたい」という、今日の授業の振り返りを入れると評価にもつながった。

- ・学んだことをこれからの生活に生かそうという気持ちを高める。

【評価の視点】

○親切にできたときとそうでないときの気持ちの違いについて深く考え、自分のこととして捉えることができたか。
(評価方法:発表、学習プリントの記述)

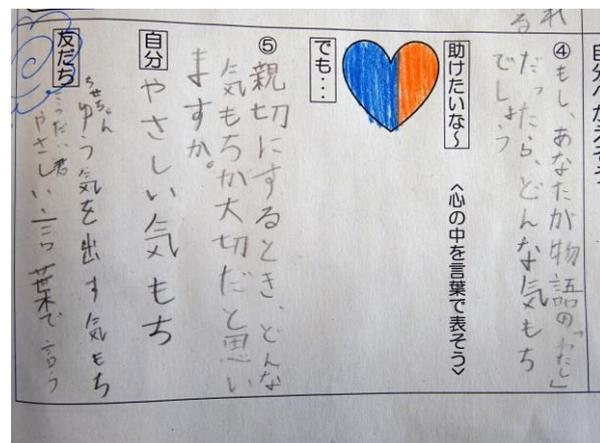
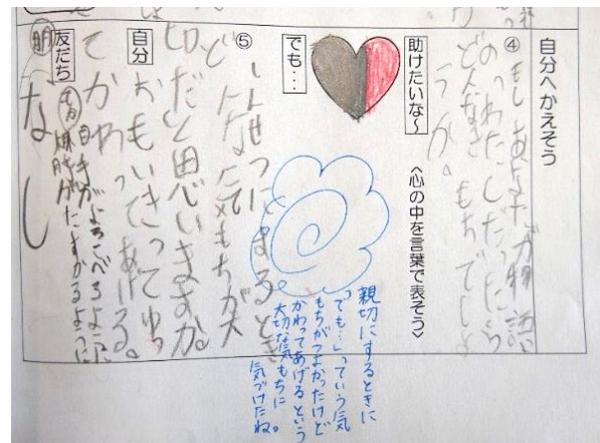
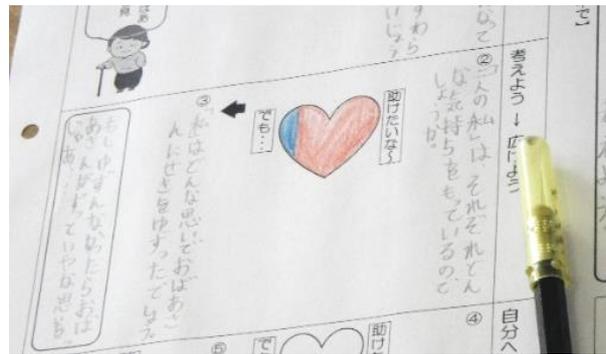
5 授業実践のまとめ

(1) 手立てについて

手立て①では、本時の道徳的価値を自分のこととして捉えられるように「あなたが物語のわたしだったら、どんな気持ちでしょうか」という発問をした。「助けたい。でも・・・」という気持ちを心情メーターで表現できるようにし、理由を書く時間を十分に取った。その後、一人一人が心情メーターを黒板に貼り、「助けたい」と思う理由と「でも・・・」と思う理由の双方の意見を発表した。誰もが助けられることが正しい行動だとは分かっているけれど、「助けたいけど勇気が出なくて助けられないかもしれない」「声をかけるのは恥ずかしくて自分にはできないかもしれない」「他の誰かが助けしてくれるだろう」など、行動に移すことが難しいことであるという共通理解を学級全体でもつことができた。また、誰がどんな思いをもっているかを知ることができ、その後の交流活動へとつなげることができた。

手立て②では、児童の考えを「助けたい」「でも・・・」という2つの心情に分類し、なぜその気持ちをもったのか理由を尋ねる場面で思考ツールを用いた。今回は2つの心情の葛藤を捉えさせる上で、心情メーターを活用し、気持ちを視覚化した。児童は心情メーターを操作することで、物語の「わたし」や自分自身の心の揺らぎを表現しやすくなったと感じていたようである。本時では、ある一時の心情について心情メーターで表現したが、心情メーターの活用方法として、時間を追ってどのように心情が変化していくのか、実際に動かしながら考えてみるという手段もあった。また、もう一つ思考ツールが効果的にはたらいだ場面は、自分自身の思いを相手に伝えることができる点である。本時では、「もし、あなたが物語のわたしだったらどんな気持ちでしょうか」という発問を投げかけた。児童は黒板に貼られた心情メーターを見ながら、自分と同じ考えの友達がいることを知ったり、全く正反対の思いを感じている友達がいたりすることを知った。特に自分と異なる思いをしている友達の意見を聞き、認め合う発言が聞かれた時は、心情メーターの有用性を確認することができた。

手立て③では、「親切にするときに大切にすること」について交流活動を取り入れた。多くの児童が思考ツールの活用を通して、課題とされていた自分の思いを伝えることができた。また、児童同士がお互いの思いについて知ることができ、認め合う機会を作ることができた。これを生かし、交流場面では、一人一人の考えを伝え合う



ことにとどまらず、さらに、友達のよい意見についても話し合う場面を設けた。「〇〇さんの△△という意見がよかったです。」という発表を行うことができていた。その結果、自分の考えと友達の考えの違いに気付き、様々な考えがあることよさに気付き、自分の考えをもう一度考え直すきっかけになったと考える。

(2) 成果と課題

【成果】

- 「もし、あなただったら・・・」という中心発問をしたことで、教材の登場人物の心情を考えることにとどまらず、自分のこととして捉え、深く考えるきっかけとなっていた。
- 思考ツールの活用は、自分の思いを視覚化することができ、考えたことの再確認をするきっかけを作ることができた。
- 思考ツールの活用は、自分の思いを伝え、相手の思いを明確に知ることができ、交流活動の場でより考えを深めるのに効果的であった。
- 交流活動では、友達の考えを聞き、「〇〇さんの△△という考えがよかったです。」と他者を認める発言があった。自分の考えをさらに深め、新しい発見やよりよい考えを導く姿が見られた。
- 3つの手立てから道徳的価値を自分のこととして捉え、考えを深める姿が見られた。

【課題】

- ▼自分自身と重ねながら、主人公の思いを捉えるために、場面の変化や主人公の心の動きに沿って、心情メーターを動かしながら、友達と見せ合ったり、話し合ったりする活動を入れるとよかった。
- ▼個人で「これからどうしていきたい」という、今日の授業の振り返りを入れると、本時の評価や今後の生活にも生かそうという意欲にもつながった。

実践例2 (白沢小学校 1年A組 岡村美保教諭)

1. 主題名 うそばかりついていると A 正直, 誠実

2. ねらいと教材

ねらい 私たちは、うそばかりついている人の言うことは「どうせうそにちがいない。」と思い、信じようと思わなくなることを理解することで、うそをつかないで正直にしようとする心情を育てる。

教材名 ひつじかいのこども (出典 小学道徳 生きる力1 日本文教出版)

3. 主題設定の理由

(1) 価値観

本主題は、学習指導要領の内容項目 A「うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直にのびのびと生活すること」をねらいとするものである。これは、偽りなく真面目に真心を込めて、明るい心で楽しく生活することに関する内容項目である。

人は誰でも自分のよさを生かし、自分らしさを発揮しながら生きていきたいと願っている。そして、この自分らしさを形成しようとする一方で、他者の反応を意識し、他者によく思われたいと行動する。このため児童は、他者が自分に關心をもつことを願ったり、叱られたり笑われたりされたくないと思ったりするあまり、うそをついたりごまかしたりといった行動に走ることがよくある。

そこで、本学習ではイソップの有名な寓話をもとに、うそをつき続けていくとまわりの人間がどのような気持ちになってどんな反応になっていくのかを捉えさせる。そして、その上で自分自身に誠実であることが、自分のよさを発揮するために必要であること理解させたいと考え、本主題の学習を設定した。

(2) 児童観

この時期の児童は明るく素直である。また、これまでの生活の中で、うそをついたりごまかしをしたりしてはいけないことに気付いてはいる。しかし、自分に関わる問題となると、人からよく思われたいと願ったり、自分に關心を向けてほしいと思ったりするあまりに、事実とは違うことを言ったり、うそをついて自分の責任を回避したりすることがある。

このような児童に、自分のよさを生かしながら伸びやかに生きていくためにも、うそや偽りをしないで生活していく態度を培うことは大切なことである。

(3) 教材観

児童にとって、童話という教材は学習の枠のそとにあるという考えが強く、それが逆に集中して物語に同化させる力をもっている。また、本資料は児童にとって小さい頃からなじんできたイソップ童話の1つで内容が分かりやすく、児童が興味をもって学習に取り組んでいけると予想される。そこで、本資料を用いて主題に迫ろうと考えた。資料のおおよその内容は、以下のとおりである。

本資料は、子どもの羊飼いと村人との関わりを中心に、3つの場面で構成されている。

1. 子どもの羊飼いがひとりぼっちで退屈していた。ある日「おおかみがきたぞう。」と大きな声で騒ぎ立てるいたずらを思いついた。
2. 羊飼いが大きな声で大人に呼びかけてみると、大人はおおかみを退治しようと集まってきた。羊飼いはおもしろがって、大人に何回注意されても、同じいたずらを繰り返した。
3. ある日、本当におおかみがやってきたが、大人は誰ひとり羊飼いを救いに出でこなかった。

本資料は、3つの場面を通して、羊飼いの気持ちと大人の気持ちを対比して深く考えることができる資料である。特に2の場面で、羊飼いの言うことを信じられなくなっていく大人たちの気持ちの変化に重点を置き、誠実に生きることの大切さを十分に考えさせることで、主題に迫ることが可能になると考える。

4. 授業の実際

(1) 準備 場面絵、様々な表情の顔の絵 (表情円)、ワークシート

(2) 展開

過程	学習活動及び主な発問	時間	児童の反応	指導上の留意点 (太字は本研究に関連する部分)
導入	<p>1. うそをついたときの気持ちを話し合い、本時のめあてを知る。</p> <p>【補助発問①】 うそをつくと、どんな顔になるか。また、うそばかりついているとどうなるか。</p>	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・悪い顔 ・こわい顔 ・うそばかりついていると悪い人になる。 	<p>【手立て①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●実際の体験を思い起こさせることで、児童の意識を、ねらいとする価値へ向ける。 <p>【手立て②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●様々な表情の顔の絵(表情円)を用意しておき、児童の発言によって黒板に貼っていく。また後の過程でもこの絵を活用して、それぞれの場面での登場人物の気持ちを確認していき、児童の思考の手助けとする。
<p>《めあて》 うそばかりついていると、どうなるかかんがえよう。</p>				
		<p>◎児童は表情円の表情・色・大きさを手がかりに、教材文中の出来事や人物の心情を整理しながら、深く考えていた。</p>		
	<p>2. 教材「ひつじかいのこども」を読んで話し合う。</p> <p>【補助発問②】 はじめに羊飼いが「おおかみだ」と言ったとき、大人たちはどんなことを考えて助けに行ったのでしょうか。</p> <p>【補助発問③】 うそだと知った大人たちは、どんなことを思ったでしょう。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・大変だ。 ・早く助けに行かなくちゃ。 ・食べられちゃう。 ・え、なんで？ ・ふざけるな。 ・頭にきた。 ・うそつきめ！ ・うそでよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●資料の内容を十分理解できるように、場面絵を提示しながら、読み聞かせをする。 ●退屈している羊飼いの気持ちにも触れ、大人たちの気持ちと対比させる。 ●だまされたと分かったときの大人たちの怒りを捉えさせる。

25分

【補助発問④】

2回目に羊飼いが「おおかみだ。」と言ってきたとき、あなただったらどうしますか。

【補助発問⑤】

3回目（4回目～）に羊飼いが「おおかみだ。」というのを聞いて、あなただったらどうしますか。

- ・またうそだから、助けに行かない。
- ・今度は本当かもしれないから、助けに行く。

- ・またうそだから、助けに行かない。
- ・今度は本当かもしれないから、助けに行く。

- 自分のこととして考えさせるため、前回がうそだったということをおさえた上で、教師が羊飼いの役になり、児童を大人たちの役にならせ、2回目以降の「おおかみだ」を聞いてどうするか、それぞれで判断させる。また、自分がそのようにする理由も考えさせる。

【手立て①】

- 児童の様子を見ながら役割演技を数回繰り返し、次第に助けに行くと考える児童が減っていくことに着目させた上で、次の話し合いにつなげていく。



◎メンバーを変えながら役割演技を3回繰り返したことで、児童は教材文中の出来事を自分のこととして捉えてよく考え、次第に「助けに行く。」と答える児童が減っていった。そのため、この後の中心発問において、活発に意見を出し合っていた。

▼時間や空間の関係で全員に役割演技をさせることができなかったが、全員に経験させるとより効果的になったのではないか。

◎助けに来ようとしないうそが現れる一方で、最初から最後まで、「助けに行く。今度は本当かもしれないから。」と発言する児童もいた。児童は、教材中の出来事を自分のこととして捉え、深く考えていた。

【中心発問】

はじめは、助けに行くという人が多かったのに、後になるほど助けに行こうとする人が少なくなったのは、なぜでしょう。

- ・頭にきたから。
- ・何度もうそをつかれたから。
- ・またうそだと思ったから。
- ・信じられなくなったから。

【手立て③】

- 羊飼いがうそを繰り返すうちに、大人たちが助けに行くのをやめた理由について話し合うことで、うそばかりついている人の言うことは、「うそだ思うようになったこと」「信用できないと思うようにな

展開



ったこと」に気付かせ
せる。

◎まず2～3人で話し合ってから、全体での話し合いに参加したことで、児童は自信をもって発言することができた。また、板書の表情円で児童の考えを可視化したことにより、児童一人一人が自分の考えをもって話し合いをすることができた。

▼ここで学習活動4で予定していた、本時のめあてを確認する学習活動を行っておくと、3の本時で学習したことを実生活に広げて考える活動が、より充実したのではないだろうか。

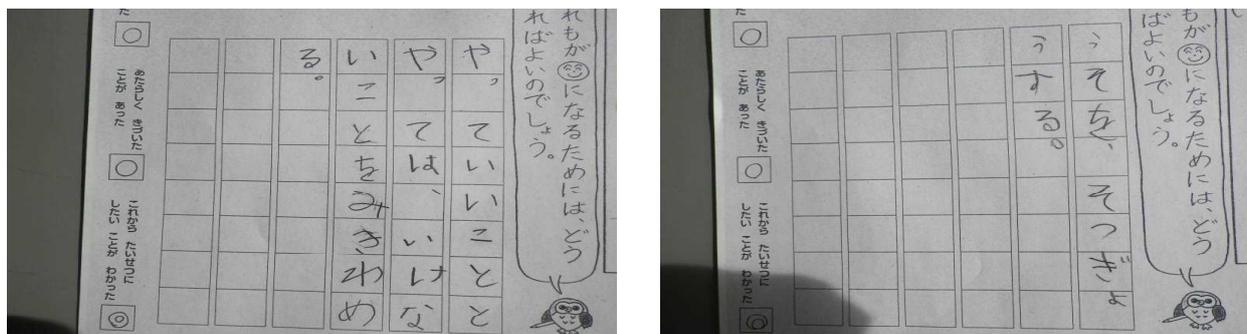
	<p>3. うそをつかないで生活する大切さについて考える。</p> <p>【補助発問⑥】 誰もが😊になるためには、どうすればよいのでしょうか。</p>	<p>10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに謝る。 ・人をだまさない。 ・うそをつかない。 ・正直にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分のよさを生かしながら伸びやかに生きていくためにどうしたらいいかを具体的に考えさせ、ワークシートにまとめさせる。
<p>終末</p>	<p>4. 本時の学習のまとめをし、教師の話聞く。</p>	<p>5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・またうそだと思われる。 ・信じてもらえなくなる。 ・うそをつかないぞ。 ・うそはだめ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「うそばかりついていると○○」の○○の部分を発表して本時のめあてを確認し、学習のまとめとする。 ●教師自身のうそをつかなくてよかったというエピソードを紹介し、実践意欲を高める。

評価の視点：うそばかりついているとどうなるかということについて、うそをつく側やつかれる側などの視点から深く考え、自分の日常生活と関連させて考えることができたか。
(発言及びワークシートの記述より評価)

5. 授業実践のまとめ (1) 手立てについて

手立て①については、物語中の人物に同化できるという低学年の児童の発達段階の特徴を考慮して、だます側の羊飼いを教師、だまされる側の大人たちを児童として役割演技を取り入れた。その結果、児童から「だまされて、いらいらする。」「うそをつかれると、腹が立つ。」といったような、実感を伴った発言が出てきた。特に最後の役割演技では、助けに来ない児童も現れ、なぜそうしたのかと理由を問うと、「何回もだまされたから、信じられなくなってしまった。」と、本時のねらいに迫るような答えが返ってきた。役割演技を通して児童が教材中の出来事を自分のこととして捉えることができたので、全員の児童の発言が積極的になった。

手立て②については、表情円を取り入れた。発言を板書にまとめる際にどれを貼ったらよいかを確認しながら、プラスの感情にはピンクの表情円、マイナスの感情にはブルーの表情円を貼って、児童の教材に対する思いの流れを視覚化していった。特に本授業では、だまされ続けていく大人たちのブルーの表情円の大きさを変化させていったことにより、児童は、何回もだまされるうちに大人たちの不信感が大きくなっていくことを感じ取り、本授業の中心発問に対して深く考え、全員が自分の考えをもつことができた。低学年の児童にとって表情円は、言葉にしづらい部分を補うことにも有効である。そこで本授業では、学習したことを実生活に広げる場面での発問に対しても表情円を取り入れてみたところ、考えるべきことがはっきりし、児童の思考の助けとなった。



児童のワークシート

手立て③に関しては、ペア学習を取り入れ、主発問に対する全体での話し合いに入る前に、隣の児童と話し合う時間を設けた。大勢の中ではなかなか発言ができない児童も、少人数だと話し合いがスムーズにでき、それが自信になって、全体での話し合いに積極的に参加することができた。また本授業においては、だんだんに『羊飼いを見捨てようとする児童』の人数が増えていったが、最初から変わることなく『羊飼いを助けようとする児童』も少人数であるがいた。そこで少人数の意見をあえて話し合いで取り上げ、その理由を聞いたところ、「だって、今度こそは本当かもしれないから。」という答えが返ってきた。反対や少数の意見を意図的に取り上げたことが、多様な意見に触れるために有効であった。

以上の3つの手立てを講じたことで、児童一人一人が教材中の出来事を自分のこととして捉えてよく考え、考えたことを活発に表現することができた。そのため交流が充実し、本時のねらいである「うそをつかないで正直にしようとする」ことについての考えを深めることが可能になったと考える。

(2) 成果と課題

【成果】

- 教材中の登場人物の気持ちを考える際に役割演技を取り入れたことで、児童が教材中の出来事を自分のこととして捉えることができたので実感を伴った発言がみられ、活発な話し合いが可能となった。
- うそをついた少年を助ける・助けないの人数の変化を根拠に、うそをつき続けているとどうなるか考えさせたことが、ねらいにせまるために効果的であった。
- 表情円を利用して登場人物の感情の変化を視覚化したことにより、児童が自分の考えを整理しながらより深く考えることが可能となった。
- 考えたことを隣同士で自由に話し合った後に全体で話し合ったことで、児童が自信をもって話し合いに臨むことができ、活発な話し合いにつながった。
- 教師が児童のつぶやきや役割演技中の児童の葛藤などを話し合いに取り上げたことで、児童が深く考え、多様な考えに触れることができた。

【課題】

- ▼学習活動3の、本時で学んだことを実生活に広げて考える場面で、3分の1ほどの児童が最初どう答えていいかわからずにいた。発問の仕方を更に工夫する必要がある。

実践例3 (薄根小学校 5年竹組 佐藤有紗教諭)

1、主題名 折れたタワー (内容項目 B 相互理解、寛容)

2、ねらいと教材

(1) ねらい

誰にでも失敗があることを理解した上で、相手の失敗を許そうとするひろしの思いを捉えることを通して、相手の立場になって、広い心で許そうとする心情を育てる。

(2) 教材名

「折れたタワー」 (出典 小学道徳 生きる力5 日本文教出版)

3、主題設定の理由

(1) 価値観

本主題のねらいは「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること」である。小学校高学年という時期は、考えや意見の近い者同士が接近し、そうでない者を遠ざけようとする行動が見られることがある。そこで、相手の意見を素直に聞き、なぜそのような考え方をするのかを、相手の立場に立って考える態度を育てることが求められる。広い心で自分と異なる意見や立場を尊重することで、違いを生かしたよりよいものが生まれるといったよさや、相手の過ちなどに対しても、自分にも同様のことがあることとして謙虚な心、広い心で受け止め、適切に対処できるようにすることが大切である。

(2) 児童観

本学級は、友達を大切にしようとする児童が多く、穏やかな雰囲気をもつ。しかし、友達と異なる意見をもったとき、積極的に発言できる児童が少ない。また、相手の意見を聞かず、自分の感情のままに行動してしまう様子も見られた。これらのことから、相手の意見を素直に聞き、なぜそのような考え方をするのかを、相手の立場に立って考える態度の大切さに気付かせたい。

(3) 教材観

本教材は、自分の失敗を許してくれなかった友達が失敗をしたとき許そうとできるか、という児童自身の経験と重なり、共感しやすい教材である。誰にでも失敗はあることを理解した上で、さらなる関係をもとうとすることの大切さに気付けるようにしたい。そこで、マトリクスや付箋紙などの思考ツールを用いて、自分の考えを明らかにした上で、主体的・対話的な意見交流を行うことで、広い心について考えを深められるようにしたい。

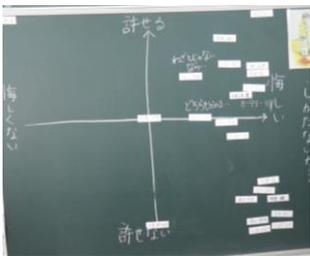
4、授業の実際

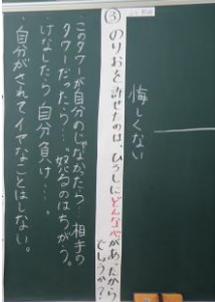
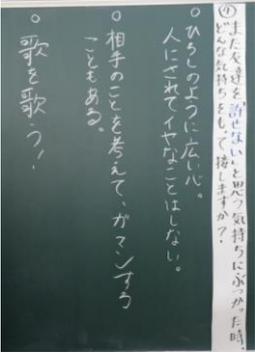
(1) 準備

教科書、道徳ノート、学習プリント、場面絵、ネームカード

(2) 展開

過程	主な学習活動	指導上の留意点及び支援 (太字は本研究に関連する部分)
導入	1、本時の学習内容「広い心」をつかむ。 友達を許せない経験について話し合う。	【手立て①】 ・児童自身の体験を聞くことで、一人一人に課題意識が生まれるようにする。
5分	【補助発問】 友達を許せないと思った経験がありますか。 ・色々されたのに「ごめん」の一言で片付けようとされたとき。 ・注意しても聞かないとき。	

	<p>【めあて】 広い心について考えよう。</p>	
<p>展 開 30 分</p>	<p>2、教科書を読み、じっとうつむくのりおを見たひろしの考えについて発表する。</p> <p>【補助発問】うつむくのりおを見て、ひろしはどんなことを考えたでしょう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悔しいし、悲しい。 ・せっかく頑張ったのに。 ・仕方がない、わざとじゃない。 <p>【補助発問】あなたが主人公の立場だったらどんなことを考えますか？</p> <p>3、マトリクスを用いて自分の考えを明確にし、黒板にネームカードを貼る。黒板を基に意見交流をする。</p> <p>①席を離れ、個々で自由に交流をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前に謝っても許してくれなかった。さらに、一生懸命作ったタワーをこわされて、うつむいているだけで「ごめん」の一言もないから許せない。 ・人に壊されたのはすごく悔しいけど、わざとじゃないのに怒るのは、かわいそう。  <p>【補助発問】意見交流をしてみたの感想を書きましょう。</p> <p>②意見交流を通じた感想を全体で共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悔しいと思う人は多かったけど、許せないという人もいた。でも、許せないと思う気持ちもあって、両方分かると思った。 ・最初は許せないと思ったけど、理由を聞いて、マスクのことも謝ってくれたら、ひろしのように許せるかもと思えた。 ・許せないと思っていたけど、わざとじゃないし、自分もやってしまうかもしれないから、許せる気持ちに近付いた。 	<p>【手立て①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あなたが主人公だったら？」と問うことで、主人公の心情を確認したり共感したりし、正直な自分の気持ちを考えることができるようにする。 <p>◎マトリクスを活用したことで、児童の話したいという気持ちが高まっている様子が見られた。「〇〇君はなんでこの位置なんだろう・・・」などのつぶやきも見られた。</p> <p>【手立て②③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マトリクスを基に、自分とは違う考えをもっている人と意見交流を図るよう声かけすることで、色々な人の考えに触れることができるようにする。 <p>▼最初の位置から変わった児童を赤の矢印で示すなど、意見の変容も視覚化できるとよかった。</p>

	<p>【補助発問】みんなの意見の中では、許せない人という人が多いけど、どうしてひろしは許せたのかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優しい気持ちがあったから。 ・許してあげる広い心があったから。 <p>4、のりおを許せたひろしの心について考え、発表する。</p> <p>【中心発問】のりおを許せたのは、ひろしにどんな心があったからでしょうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・壊されてもわざとじゃないから大丈夫！という広い心があったから。 ・自分がされて嫌なことはしないとと思ったから。 ・マスクを忘れたひろしと、タワーを壊したのりおは同じだと思って、せめるのはかわいそうだし、仕方ないと思ったから。  <p>▼出てきた意見を内容によって色分けするなどして、板書を分かりやすくし、「誰にだって失敗はある」ということを強調できるとよかった。</p>	<p>【手立て①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えが深まる補助発問をし、自分にも、誰でも失敗があるという気持ちまで考えられるようにする。また、中心発問で自信をもって答えられるようにする。 <p>【手立て①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えとの違いを感じながら、のりおを許せたひろしの気持ちについて考えられるようにする。
<p>終末 10分</p>	<p>5、振り返りとして、導入で触れた「友達を許せない経験」にもう一度ぶつかったとき、どんな気持ちで接するかをプリントに記入する。発表をして、全体で共有をする。</p> <p>【補助発問】また友達を「許せない」と思う気持ちにぶつかったとき、どんな気持ちをもって接しますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わざとじゃないし、失敗は誰にでもあるから許してあげるといいう広い心をもって接する。  <p>◎「悔しいけど、我慢することも必要」など、許すということに心の痛みが伴うことを理解できた発言が見られた。</p>	<p>【手立て①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「また友達を許せないと思う気持ちにぶつかったらどうする？」と問うことで、これからの自分の生活における広い心について考えることができるようにする。 ・友達を許すということには、心に葛藤が生じることを話し、どんな気持ちをもつことが、よりよい関係につながるのかを中心に、考えることができるようにする。

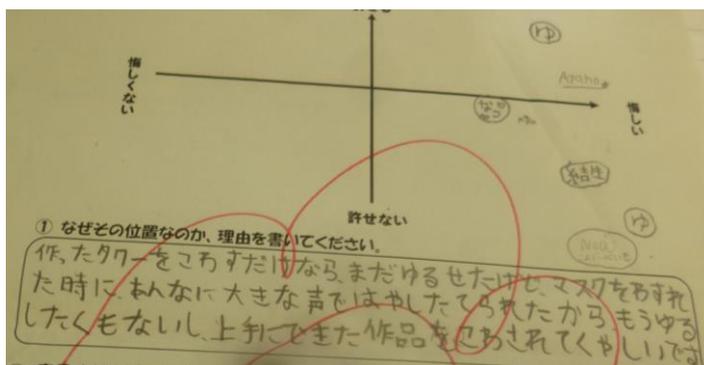
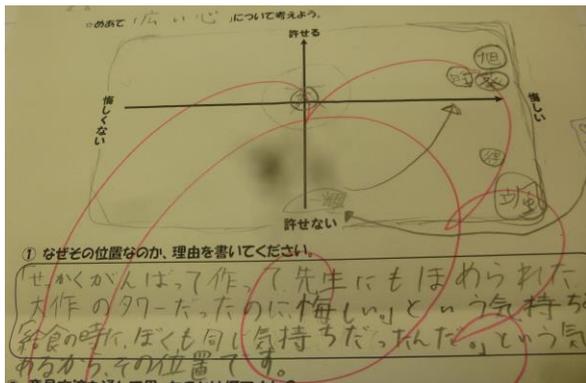
【評価の視点】

○相手の失敗を許そうとするひろしの思いを捉えた上で、誰にでも失敗は起こりうることを理解し、自分の日常生活と関連させて考えることができたか。 (評価方法)観察・学習プリント

5、授業実践のまとめ

(1) 手立てについて

手立て①では、「あなたが主人公だったら？」と問い、主人公の心情を確認し、共感することで、正直な自分の気持ちを考えることができたようにした。「すごく悔しいけど、わざとじゃないのに怒るのはかわいそうだから許せる。」などの発言・記述が見られ、主人公の悔しいけど、許そうとする気持ちに共感する児童が見られた。一方で、「ぼくだったら、マスク忘れの発言で傷ついたら、悔しいから許さない。」「ぼくは謝ったのに、相手は謝ってくれないなら許さない。」など、主人公の取った行動とは異なる意見をもつ児童も半数近く見られた。自分のこととして考え、正直な気持ちを表現することができた。



手立て②では、マトリクス上でネームプレートを使用し、自分の気持ちの位置を示したことによって、自分や友達の気持ちを視覚化することができた。そのことによって、「なぜあの子はあの位置なのだろう?」「あの子と近い位置だから、同じ意見かも。」など、児童同士の「話したい!」という気持ちを高めることができ、活発な意見交流につなげることができた。

手立て③では、マトリクスを基に、自分とは違う考えをもっている人と意見交流を図るよう声かけすることで、色々な人の考えに触れることができたようにした。ネームプレートの位置を見て、自分とは異なる意見をもつ友達を見つけられることを確認したことで、普段仲良くしている友達だけでなく、様々な友達と意見交流をできた児童が多く見られた。また、意見交流をした後には、「ぼくのネームプレートの位置を変えたい。」というつぶやきもあり、多くの友達の意見を聞いて、考えの変容があった児童も見られた。

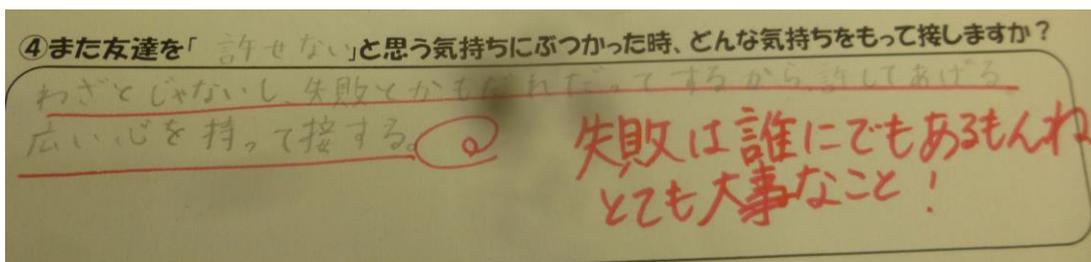
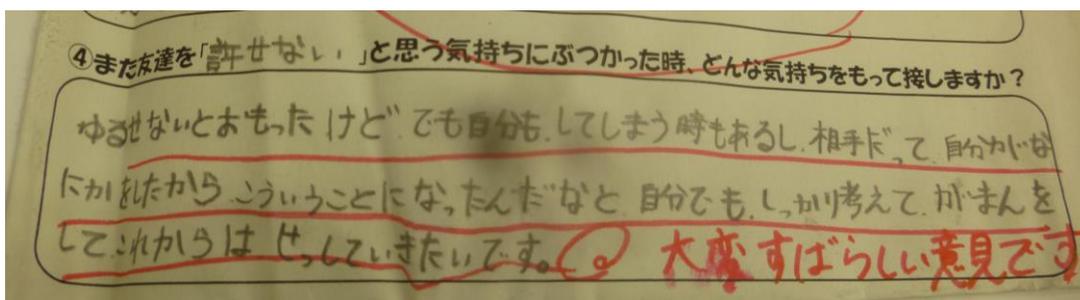
② 意見交流を通して思ったことは何ですか？
 みんなが悔しいと思う人は、多かたけど、ゆるせないという人もいた。でも、ゆるせないと思う人の気持ちも、あって、りょうほう分かる気がした。

② 意見交流を通して思ったことは何ですか？
 聡明君の意見を聞いたから少し悔しくなくなりました。

(2) 成果と課題

【成果】

- 「あなたが主人公だったら？」と発問したことは、正直な児童の気持ちを引き出すために有効だった。
- マトリクスという思考ツールを活用したことにより、活発な意見交流につながった。
- マトリクスを基に、多様な考えに触れることのできる学習形態をとったことは、考えを深めることのできる児童の育成に有効だった。
- 3つの手立てを講じたことで、児童は授業内容を自分のこととして考えられるようになった。
- 最後の振り返りの場面では、児童がこれから起こるかも知れない場面での広い心について考えた。他者を許すことはそう簡単ではないと感じる児童が多く、考えを深めることができた。



【課題】

- ▼黒板のマトリクス上で、最初の位置から変わった児童の意見を赤の矢印で示すなど、考えの変容も視覚化できると、より一層考えが深まった。
- ▼中心発問によって出てきた児童の意見を内容によって色分けするなどして、板書を工夫し、「誰にだって失敗はある。」ということを強調できると、ねらいとする相互理解のより深い理解につながった。